

I. 国内研究プロジェクト

校内研修の事例検討会・教育のアクションリサーチ研究会報告

センター教授 秋田 喜代美

本研究プロジェクト「学習環境改善のための学校支援システムの比較調査および開発研究」の国内プロジェクトの狙いの一つに、実際に学校支援システムを研究者や研究員が関わりながら考えるアクションリサーチを行うということがある。そのために3年間、毎年数回の校内研修の事例検討会を、研究スタッフの秋田喜代美、鹿毛雅治客員教授、村瀬公胤客員講師、センター研究員である佐藤学教授、ならびに協力研究員である石井順治氏、佐藤雅彰氏、庄司康生氏、松木健一氏、渡邊由美子氏、また本年度はCOE連携校関係で東京大学附属中等教育学校の草川剛人副校長、現職公立小中学校校長の深沢道彦氏、谷井茂久氏、長岡富美子氏らの協力を得て実施してきた。そこで議論になった点は、学校における教師の学習システムをいかに構築するのか、そのために外部からの支援はいかにして可能であるのか、教師の学習の場としての授業研究のあり方等であり、実際にそれぞれが関与している学校からの事例報告をもとにしながら、検討を行った。

そこで本年度センター年報『ネットワーク』では、この検討会で3年間に報告された事例報告の中で、外部助言者と授業研究のあり方との関連を問題にした内容に焦点を絞って、原稿掲載を行っている。実際に校内研修に関わっていきながらどのような点が困難であるのか、どのようなことが発見されているのか、いかなる可能性を見出しているのかを、会でご報告いただいた石井、庄司、村瀬各氏にその報告をまとめていただき執筆いただいた。また鹿毛氏は学校ではなく、教育センターで教師が振り返りを促すリフレクションシートというツールの開発を行っておられる。その実践を寄稿いただいた。

学校内での同僚性をいかに築くのかということと同時に、学校内部では言いにくいことや同じような視点に立ち、研修談話がマンネリ化するのをいかに外部助言者のサポートを得て活性化し、協働で研究を進めるのかは、

今後の大きな課題である。そして本プロジェクトでの成果は、今後論文化し発表していく予定である。

そこで、外部助言者として評判の高い佐藤学氏の助言のあり方を分析するというのを、一つの事例研究として行った。まだその分析途上であるが、すでに学会等で発表したものをさらに整理して、校内研究談話分析試論として本年報に掲載してある。

また実際に、この校内研修の事例検討会を中核にしなが、さらに外部に開かれた研究のための連携組織として、教育のアクションリサーチ研究会を2004年度からたちあげ、本年2005年度にも継続して、8月1,2日の2日間、熱海で合宿形式で実施した。参加180名、4割が大学で学校支援に関わっている研究者、6割が小中高校の中堅以上の教師であり、申し込み人数が会場宿泊予定者を上回り、残念ながら参加希望者を途中でお断りする状況となった。高校においても授業研究のアクションリサーチグループがたちあがったことは、今後の中等教育改革への大きな期待ともなる。年々アクションリサーチ研究会への意識、学校におけるアクションリサーチへの期待は高まってきている。また来年度も継続的に実施していく予定である。これが2006年度からの学校教育高度化センターにも引き継がれ、授業研究の共同研究の連携ネットワークの組織基盤となっていくことを願っている。この教育アクションリサーチ研究会では、15人単位での小グループ検討が2日間にわたって実施されるとともに、2つのシンポジウムも開催された。本報告には、このアクションリサーチ研究会代表の佐藤学氏が、2日間のまとめで使用したパワーポイント資料を次頁に掲載した。アクションリサーチに定型の形はない。さまざまなく間>において、学校を改革し、教師の成長を研究支援することを、若手研究者と共に行うことが確認されたことは、今回の一つの大きな成果であるだろう。

アクション・リサーチ研究会 会のこれから

第2回教育のアクション・リサーチ研究会
総括

佐藤 学

1

アクション・リサーチの多様性とその 蓄積

- アクション・リサーチは<間>に成立する
教師と研究者の<間>
実践と理論の<間>
その<間>で何が媒介になり、何を共有するか。
- 一人ひとりの研究史に埋め込まれたアクション・リサーチ・教師の仕事を内側から認識する方法
- 現場との関わり・教師との協同の多様性のなかにアクション・リサーチのアプローチは多様である。

2

学校の改革とアクション・リサーチ

- 出発点の問題＝何から出発し何に支えられるか。
- 学校の活動システムのデザインと再構築
- 教師の専門的成長が促進される(疎外される)システム＝現実の学校はこのジレンマの中にある。アクション・リサーチもこの<間>に成立する。
- 学校改革の経験の蓄積＝変化を生み出す<仕掛け>と変容過程の研究

3

教師の成長を研究する

- アクション・リサーチは、教師の専門的成長をどう支援できるのか。
- アクション・リサーチの研究者は、教師から学校の現実から何をどう学ぶのか。
- 子どもと教師の活動と思考の装置としての教室(学校)
- 教師の認識と思考の枠組みとその変容・発達
- 教師と研究者の<ずれ>から出発する。

4

若い研究者(院生)の成長を支える

- 研究者(院生)の世代間交流
- 研究の多様性の交流
- 同世代の研究者(院生)の交流
- 多様な教師との交流
- アクション・リサーチの研究者は、現在(あるいは将来)教師教育者である。

5

新しいネットワークの形成

- アクション・リサーチはネットワークの中で進展する。
- 「高校学びの広場」の結成
- 新しいワークショップ(学校の公開研究会)などの情報交換と交流
- 去年から今年へ、今年から来年へ

6